

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 朴昭炫

本論文は、日本における近代美術館の成立過程を明らかにしたうえで、そこに実現した公共性の歴史的な構造を検証したものである。1926年開館の東京府美術館（現在の東京都美術館）と1952年開館の国立近代美術館（現在の東京国立近代美術館）を考察の対象とする。近代美術館を研究対象とすること自体が、多くの先行研究を持たず、すでに独創性を有している。

従来の研究では、どちらかといえば両者の連続性が強調され、直線的な発展史観でとらえられることが多かったが、本論文はむしろ両者の断絶面に注目、それぞれの館の建設に向けて尽力した勢力を美術家と美術批評家とに分けて、彼らの美術館に対する理想像が対立する様相を詳細に分析することで、日本社会に近代美術館という芸術公開の場が登場するダイナミズムを明らかにしている。美術館研究に新たな領域を開拓した点が高く評価できる。

まず、東京府美術館開館に至る過程は、明治美術会と国民美術協会の主張を通して解明する。それは、西欧世界の美術がいかに日本社会に移植されたかを探る問題にほかならない。当初、美術館には国民教育の役割が期待されたが、結局は美術家の作品発表の場へと収斂してしまう。

ついで、美術批評家と美術史家が、それぞれにジャーナリズムと大学を背景に登場し、彼らの発言の場が社会的に形成され、美術家とは異なる観点から美術館が求められた時期を考察する。東京府美術館が美術団体の発表の場にとどまる現実を前に、「近代美術」が重大な問題として浮上する。明治以降の日本の「近代美術」と西欧の「近代美術」という異なる美術観がせめぎ合いながら戦争の時代を迎える中で生まれた国家と芸術の緊張関係をも視野に収める。

最後は、敗戦後に日本が文化国家建設を標榜する中で、それを実現する社会施設として近代美術館が待望される過程を明らかにする。それは帝室博物館から国立博物館への転換に始まり、文化財保護制度の整備により新たな役割を担った古美術が逆に近代美術を性格づけること、占領期におけるGHQの指導など、国立近代美術館の成立をもたらした力学を明らかにした。

いずれも同時代の資料に基づき、近代美術館建設の背景をとらえたことが大きな成果である。

美術家対美術批評家という対立をいささか図式的にとらえたため、美術館設置者たる府や国の思惑、一般観衆の期待する美術館像などが抜け落ちたこと、国立近代美術館より早い1951年開館の神奈川県立近代美術館を論文中に十分に位置付けることが出来なかった点など不備な部分はあるものの、本論文が明らかにした近代美術館成立の歴史的構造は実は今日になお続く問題であり、歴史研究にとどまらず、現代の文化政策学にも寄与する成果として高く評価できる。

したがって、本委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと判断する。

(別紙2)

(別紙3)

試験の結果の要旨

氏名 朴昭炫

試験においては、本論文を中心として質疑応答を重ね、学力検定を行って、論文について判定されたものと等しい学力があると評価することができた。

以上述べた審査の結果を総合して、博士（文学）の学位を授与するに値するものと認める。